

ラテンアメリカのポップカルチャー 「オタク文化」による日本文化伝播

佐藤 一毅

21世紀に入り日本のイメージアップ・情報の周知について、アニメ・マンガ、そしてゲームを中心とした「オタク文化、ポップカルチャー」の果たす役割が大変大きくなってきている。日本語を学び、日本への留学を考える世界中の若者。そのモチベーションの最も大きなものは「アニメ・マンガの聖地」日本。本稿ではこれらポップカルチャー・オタク文化の現代における役割と、ラテンアメリカ各エリアでの分析を行いたいと考える。

国際オタクイベント協会

執筆者が代表を務める「国際オタクイベント協会 (International Otaku Expo Association- 以下 IOEA)」は、世界中で開催される「オタク文化をテーマとしたイベント」の協会である。2015年3月に設立し、現在41カ国111イベントが加盟している。本部をビジネス上での協会ではなく、文化・友好を目的とし国連やユネスコをモデルとしている。目標としては、日本発祥の「オタク文化」という価値観を共有する世界中の参加者・イベントが集まることでおこるこの文化の浸透と進化を通じて、世界中に日本的な思考の理解者を増やし、世界を一体化することとしている。

協会 Web サイト - <http://ioea.info/>

2017年に、加盟イベント紹介と有識者による世界オタク文化解説を掲載した『オタクイベントカタログ2017』(A4フルカラー162頁)を発行した。オタクイベントカタログは外務省より世界240か所あまりの日本国在外公館すべてへ配布され、日本文化振興の一助として利用された。

アニメ、マンガ、ゲームの世界的な広がりとおタクの発生

ここでラテンアメリカのおタク事情の前に、世界的なオタク文化の発生と広がりについて述べる。

1970年代に、日本のアニメが子供向け番組として世界に対し安価に供給され、巨大なヒットを生んだ。フィリピンでの『ボルテスV』、フランスでの『グレンダイザー』、スペインでの『マジンガーZ』など視



Otaku Event Catalog (写真はすべて IOEA 提供)

聴率80%以上を記録する地域・番組も発生した。これ以降80年代までのTVで毎日流されたアニメが世界の「オタク文化」の苗床となった。

80年代後半から90年代にかけて、ティーンエイジャーの若者が好む現代のアニメに繋がる作品が生まれた。『ドラゴンボール』、『聖闘士星矢』は現代の『ワンピース』、『NARUTO』といった作品の源流となり、また『セーラームーン』はいわゆる「萌え」の源流となった。当時まだインターネットがない時代、TVで放送されたこれら若者向けアニメは世界のティーンエイジャーに大きな衝撃を与えた。浮世絵に初めて触れた19世紀の欧米と同じ衝撃だったと言われ、第二次ジャポニズムはここから始まったという説もある。アメリカで、アメコミ系イベントのフォーマットで海外初めて「アニメイベント」が開催されたのも90年代後半である。

2000年代に入り、インターネットの時代となり、世界は変わった。情報は光の速さで伝わり、日本の情報が世界中に伝わるようになった。アニメだけでなくマンガの存在、日本の「おたく」の存在、日本



聖闘士星矢

のコミックマーケットをはじめとした「オタクイベント」の存在。TVで放送されるメジャー作品だけでなく、膨大な日本「オタク」コンテンツの存在が世界に知られたのもこの時期となる。世界中の主だった「オタクイベント」はこの時期に開始され、現在15から20周年を迎えるものが多い。

2018年の現代、世界の若者が日本に関心を寄せる一番のテーマは「アニメ・マンガ・ゲーム」である。世界中で「オタクイベント」が開催され、その数は2,000を超え、年間来場者数は3,000万人を超える。この流れの中にラテンアメリカのオタク文化も入っている。

ではラテンアメリカのオタク状況を考察してみる。

ラテンアメリカのオタク文化

ラテンアメリカは世界で日本から最も離れた地域だ。日本、もしくは商品製造地の中国からの距離は遠く、商品の流通もままならない。また、ラテンアメリカ人口約10億人の中でブラジルの約2億人を除いた8億人がスペイン語圏である。

1980年代から2000年代にかけて約30年にわたり、ラテンアメリカ諸国では日本の限られたアニメ、特撮作品がTVで繰り返し何百回も放送された。これはラテンアメリカ諸国が安価で入手できた作品を毎日放送したためである。有名などころでは『チェンジマン』、『ジャスピオン』、『ジバン』といった特撮作品である。30年間の継続した放送の結果、ラテンアメリカの10代から40代の人間の殆どはこれらの作品を知っており、日本及び日本人のイメージアップに多大な貢献をしている。

ブラジル・メキシコをはじめとしたラテンアメリカ諸国の平均収入はまだ低い状態だが、今後の経済

発展の見込みと若者の数が多いことから、近い将来に大きな市場となることが期待されている。

オタク文化についてラテンアメリカの中では、ブラジル、メキシコ、チリ、アルゼンチン、ペルーとカリブ海諸国といった地域分類ができる。

まずブラジルだが、日系人が多くラテンアメリカ唯一のポルトガル語圏ということで、他国と違った独自の文化成長をしている。アニメについてはほぼポルトガル語吹替で放送されており、吹替作業もブラジルで行われている。その需要のため、声優の養成学校なども存在する。サンパウロで開催される“AnimeFriends”というイベントは、15周年を迎え約12万人の参加者をもつ一大イベントへと成長している。ラテンアメリカの中では日本のオタク文化が最も浸透している国と言えるだろう。



Brazil_AnimeFriends

次にメキシコだが、アメリカ合衆国と隣接し、日本からの直行便のある唯一のラテンアメリカ国ということもあり、近年オタク文化の浸透が急速に進んでいる。アニメのスペイン語への吹替はここで行われているものが多く、ラテンアメリカだけではなく米国やスペインへのスペイン語吹替版がメキシコから送信される場合も多い。近年日本企業の進出が相次いでいるが、「アニメを見て日本語を覚えた若者が、日本語ができるために高給で企業に採用される」という現象がおきており、日本語学習のきっかけと実利のサイクルが出来上がっている大変珍しい国になっている。

チリ、アルゼンチン、ペルーとカリブ海諸国については、メキシコからのコンテンツ、商品流入が主となる。チリのケーブルTVには「アニメ専門チャンネル」もあり、高い人気を維持している。



Mexico_jfest

また、これらの国々の中で異彩を放つのが社会主義国のキューバである。もともと『おしん』が大ヒットしているなど親日国家であるキューバだが、インターネットが未整備、携帯電話がそれほど使われていない、クレジットカードがほぼ使えないといった制限の中でも「アニメ・マンガ」の魅力は伝わっている。大学の学生主催でのイベントが開催され、芸術大学ではコスプレを「自ら作り演じる総合芸術」として正式な単位認定された授業が存在する。



Cuba_AnimeShuriken

オタク文化の日本文化伝播効果について

アニメ・マンガを通じて世界中のオタクたちは、喜怒哀楽・倫理観・平和の心といった日本の価値観を理解し、また作品が舞台とする日本の歴史・地理・職業を学び、理解する。いまや日本のアニメ・マンガは日本のあらゆる職業や場所を網羅し、最高の教材になっていると言える。日本が舞台となっていな

い作品においても、中で描かれるキャラクターは日本人的思考方法をし、日本人的な関係性をもつ。『ベルサイユのばら』、『キャンディキャンディ』、『アルプスの少女ハイジ』、『母をたずねて三千里』といった海外を舞台とした名作もまた海外で大変高い人気を得ている。これらの作品は必ずしも「リアリティ」を追求してはいない。海外の各時代・各地域を題材に、日本の読者が理解し共感できるキャラクターとストーリーを紡いだものとなっている。

つまり、アニメ・マンガなど「オタク文化」を好む若者は、自動的に知日・親日の人間になっているという特徴がある。そして各都市の「オタクイベント」はエリア最大の知日・親日イベントであると言える。

アニメ・マンガが継続的に供給され、十年二十年とオタクイベントが継続することで、そのエリアには日本の価値観を理解する人材があらゆる職場のあらゆる世代に存在する形を作ることができる。

アニメ・マンガなど「オタク文化」の価値は、単なるコンテンツ産業としての商売ではなく、これら日本式価値観の世界的な伝搬ツールとして将来すべての日本と世界の関係性に大きな貢献を果たすとともに、最も大きな価値が存在すると考える。

最後に

人は、10代から20代にかけてポジティブだった対象について、誰もが一生にわたりポジティブであり続ける。現代のポップカルチャー愛好者、世界のオタクは若者だが、彼らが成長し家族を作り人生を作り上げる中で、日本との接点が増えてくれることを願いつつIOEAの活動を継続してこうと考えている。

(さとう かずたか 国際オタクイベント協会代表)



『ハッパノミクス ー麻薬カルテルの経済学』

トム・ウェインライト 千葉敏生訳 みすず書房
2017年12月 290頁 2,800円+税 isbn978-4-622-08663-5

麻薬カルテルの悪行、関係国の社会はもちろん政治、経済への影響、その根強い組織力などを解説した刊行物は多く出ているが、本書は麻薬取引の現場まで取材して、それを執り行うカルテルを経済学・経営学の視点から解き明かそうとしたものである。

生産者、原料から始まり末端の需要者に繋ぐまでのルートの中に介在する様々な麻薬カルテルの手法や組織の維持拡大策、それを取り締まり側から見ての対処策の要項を考察し、まずはコカインのサプライ・チェーン管理、独占・寡占の効用、カルテルを企業体において行われているカルテル間の競争・協力の得失、企業の従業員と同じく人材確保の問題、広報や麻薬王のCSR（企業の社会的責任）の巧みさ、低コストの地に生産等拠点を移すオフショア化やマクドナルド顔負けのフランチャイジー・システムを駆使していることを経営学の講義の如く解明している。

米国の要請・支援で南米においてしばしば行われてきたコカ畑潰し等の対策が、生産から末端販売の間の価格へは影響しない、コカの葉の価格上昇は結局はカルテルへのダメージには至らないことを明らかにしている。また、脱法ドラッグによって麻薬取締法律の先を行く実態面でのイノベーション、闇サイトやネット・ショッピングを巧みに使った麻薬・ドラッグ販売のオンライン化、成長して投資への余剰金をもつ企業が目指す経営の多角化と同じように、カルテルがこれまでの麻薬密輸、強請（ゆすり）、誘拐、売春、自動車窃盗のみならず人間の密輸にまで絡み、米国への密入国の手引きなどにも収入源を拡大していることも注視すべきであるとしている。

米欧などに根強い麻薬需要がある限り、生産地・経由地を叩くだけの対策の効果は限定的であり馳（いたち）ごっこは果てしなく続くが、麻薬カルテルにとっての一番の脅威は習慣性・依存症がより少ない、量・質・イノベーションで上回る大麻の合法化ではないかと示唆し、これまでの麻薬対策の誤りを、①需要の抑制より供給面の取り締まりにこだわり過ぎていること、②長期的コスト（教育や予防、厚生プログラム等）より目先の経費節約（コカ畑破壊、麻薬犯罪者逮捕、刑務所経費等）を優先していること、③グローバル化したビジネスとなった麻薬組織に各国が国単位での対応をしていること、④麻薬の禁止とコントロールを混同していること；を挙げている。

麻薬カルテルのしたたかな戦略、麻薬問題の根深さを、経済学・経営学という新たな視点から論理的に説いており、一読の価値がある。著者は、英国『エコノミスト』誌でメキシコ、中米、米国国境地帯を担当するレポーターを務めたエディター。
（桜井 敏浩）



『ハーフ・ブリード』

今福 龍太 河出書房新社
2017年10月 366頁 3,800円+税 ISBN978-4-309-24830-1

ラテンアメリカは混血の人たちが大部分を占める。先住民インディヘナの土地にスペイン、ポルトガル等の西欧から白人が侵略征服し、アフリカ系の人たちを大量に奴隷として運び込んだためである。メキシコで使われる独特の禁忌の言葉に“hijo de la chingada”（陵辱された女から生まれた私生児）という究極の罵詈雑言があるが、1500年代のスペイン人による征服からのどうしようもない過去の恥辱を抱えて生きる混血児ーhalf-breed。それは両親の血筋の組み合わせにより異なった呼称があり、米国に渡った者はチカーノと呼ばれているーには内心に深い痛みがある。本書は、これに同性愛者やトランスジェンダーの人たちを含めたハーフ・ブリード探究の旅の思索集である。

差別や障碍の中にあつての閉塞感、絶望を希望に反転させるべく活動してきたチカーノの詩人、作家、アーティストの運動を、数多くのチカーノ詩を引用しつつ熱く語っている。

（桜井 敏浩）